



Title	『阪大日本語研究』6号 1994.3 要旨
Author(s)	
Citation	阪大日本語研究. 1994, 6, p. 146-149
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4461
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人物の類型化と感情 - 常識を基軸とした日常会話分析の試み -

野呂 香代子

キーワード：類型的知識，認知，社会心理，含意，意味の多層性

発話が伝える意味には，言語上現れた，命題内容だけでなく，感情や様々なニュアンスも含まれる。本論では感情を内包した発話の意味を解く鍵として常識，特に人物に関する類型的知識に注目し，言語と常識，現実世界の認知と感情との関係を探る。

たとえば「母親」という人物類型は「子供を産んだ女性」を意味するとともに，その語から「エプロン姿，優しい笑顔」等々が連想される。言語学的には外延の意味と内包の意味について述べたにすぎないが，本論ではこの二種の意味を対象を類型化するための条件と言葉により伝えられる類型的知識（いわゆる常識）とに置き換え，人物類型に関わる事象を‘人々が日常の社会的相互作用のなかで行う類型化活動’として捉え直して日常会話を分析する。

人物の類型化に伴う認知傾向を概観した後，それを社会心理的側面から検討する。最後に，発話者と会話参与者間の類型関係から引出され得る発話の意味の多層性について論じる。

人々の常識，それに対する話者の，価値観，会話参与者の位置付けに注目しながらすることが，感情を内包した日常論理の構成や皮肉のような言語外的意味の発生メカニズムを解く手掛りとなると考える。

可能文における格パタンの変遷

渋谷 勝己

キーワード：可能文，格パタン，再分析，透明化

補文がヲ格名詞句をとる可能文は，現代語において，[ニ ガ] [ガ ガ] [ガ ヲ]といった3つの格パタンをもつ。本稿は，江戸語・東京語の可能動詞可能文・デキル可能文を中心に考察し，この3つの格パタンが

どのような過程を経て用いられるようになったのかを明らかにする。

具体的には、可能動詞可能文・デキル可能文いずれにおいても、可能主体のニ格表示、対象のガ格表示は可能動詞・デキル両者の出自的な特徴が反映したものであること、それが現代語に至るまでの間にある特定のルートを通して透明な構造（〔ガ ガ〕格・〔ガ ヲ〕格）を獲得しつつあること、その間にニ格が有標のマーカーに転じたこと、などを跡付ける。また日本語可能文の格パタンは、通時的に見れば他の状態述語のそれとあわせて統一的に考えるわけにはいかないことを述べる。

近畿方言の「ル・ラル」敬語に関する一考察

宮 治 弘 明

キーワード：近畿方言，「ル・ラル」敬語，通時的研究，近世上方語，活用 の 四 段 化

近畿中央部の各地で使用される「ル・ラル」敬語は、待遇的な意味や用法に関して近世上方語の文献資料に見られる「ルル・ラルル」敬語と共通する面を持つ。本稿では、この「ル・ラル」敬語を「ルル・ラルル」敬語から派生したものとしてとらえる立場から、文献資料では確認することが難しい「ル・ラル」敬語の歴史的な展開の過程を、現在の方言における使用の実態を様々な角度から検討することによって推定した。

その結果、敬語の意味の「ルル・ラルル」の下二段活用から四段活用への変化は、助動詞「ルル・ラルル」が担う意味機能の負担軽減および意味の混同の回避によって説明できること、文献資料に四段化した「ル・ラル」敬語の例が稀であるという問題は、文献資料と方言資料との位相的な違いを考慮することによって解決が可能であること、「ル・ラル」敬語を「ハル」敬語からの派生と考える説は、待遇的な意味・用法の面だけでなく、個々の活用形の点からも成り立ちにくいこと、などを示した。

京都市方言の丁寧融合型尊敬形式「お～やす」

森 山 卓 郎

キーワード：「やす」、尊敬、丁寧、京都市方言、年齢差

京都市方言の「お～やす」は、高い待遇の尊敬語（素材敬語）として位置付けられているが、単独の用法で丁寧な意味（聞き手に対する上向き待遇）をも含んでおり、そのまま丁寧形式と共起することもない。この点で、この形式は丁寧融合型尊敬語として位置付ける必要がある。これは、高い素材待遇が丁寧な環境でしか使われないということに相関する。また、形式の用法が年齢差によって衰退し、1994年現在、第三者を主語にした言い方ができるのは70歳以上である。以下、聞き手主語と命令表現だけ使えるという層、命令表現のみ使える層というように用法が縮小する（なお、40歳台ではこの形式の使用はない）。この用法の衰退過程も形式の意味・用法と深い関連がある。

また、命令表現における待遇的意味について考察し、その中で「お～やす」の意味と用法を位置付けた。

若年層における「問題敬語」の規範意識

尾 崎 喜 光

キーワード：問題敬語、敬語の誤用、規範意識、敬語意識

埼玉県を中心とする関東地方をおもな地理的背景とする女子大学生一特に規範意識が高いと考えられるグループに対して「問題敬語」の規範意識についての調査を行なった。その結果次のことがわかった。

- ①「あげる」の美化語・上品語としての用法は半数以上の支持を得ている。
- ②「申された」「申して」「おりましたら」の丁寧語としての用法、「お待ちして」の尊敬語としての用法にはかなりの人が抵抗を感じている。
- ③「お休みします」の上品語としての用法はある程度支持を得ている。
- ④「ご持参」は待遇的には今やニュートラルな表現となっている。

- ⑤「おっしゃられた」「お乗りになられましたら」という二重敬語（二重尊敬）は半数以上の支持を得ている。
- ⑥「お求めやすい」という形式は慣用として高い支持を得ている。
- ⑦「お手紙」の謙譲語としての用法も高い支持を得ている。
- ⑧従属節内での対者敬語の使用については、「～まして」に抵抗を感じる人は少ない。「～ましたら」への訂正は少数派であるが、以前よりは受け入れられてきているようである。
- ⑨主節での尊敬語の使用はほとんど義務的だが、従属節での使用は規範が緩くなっている。
- ⑩尊敬語を丁寧語で代用することは非常に少ない。

富山県の方言について

真 田 信 治

キーワード：方言接触，混交，接触方言，東京語化

富山県の方言は，いわゆる方言区画の上では西部方言に分類されるが，この地では，地勢上また人々の精神文化上の理由から，古今東西におけるさまざまな方言事象が混じり合って存在しているのが実態である。そしてそれが富山県方言の一つの大きな特徴と言えるのである。

方言と方言，あるいは方言と標準語という同一言語の中での言語変種間に見られる接触現象は，言語接触になぞらえて“方言接触”と呼ぶことができる。そして，この接触の結果生じた新しい方言は，接触言語になぞらえて“接触方言”と呼ぶことができる。本稿では，この“接触方言”の観点から，富山県の方言の諸相を明らかにした。